

書店からみた電子書籍流通の現状と課題

(株) 紀伊國屋書店 理事・営業推進本部長

牛口順二

本来「電子書籍とは」という議論から始めなければなりません。今回はシンポジウムの趣旨にあるように、昨今「ブーム」となっている、携帯端末向けに提供されている一般向け電子書籍を中心に、特に、流通に側面を当てて報告したいと思います。

1. 紀伊國屋書店と電子書籍事業

CD-ROM による電子出版黎明期から、紀伊國屋書店は、情報流通のデジタル化に関わってきました。そうした経験を生かして、現在も、図書館向けサービス、一般読者向けサービスの両面で、電子書籍サービスに取り組んでいます。

- ・ 電子出版の嚆矢としての CD-ROM 出版と「電子書齋 バイブルズ」
- ・ 電子出版における外字対応と「今昔文字鏡」
- ・ 図書館向け電子書籍サービス「NetLibrary」と日本語タイトルの提供
- ・ 電子書籍配信プラットフォーム「BookWebPlus」と統合アプリ「Kinoppy」
マルチデバイス対応と、クラウドによる「読み継ぎ」機能など

2. 数字からみた日本の電子書籍の現状

日本の電子書籍は、立ち遅れているのか、いや、実は「ケータイ市場」という巨大な電子書籍市場がある・・・様々な議論を、まずはいくつかの数字を見比べながら、検証してみます。

- ・ 大学図書館市場における電子化資料の占める割合
- ・ 日本の電子書籍市場の推移
- ・ 米国の電子書籍販売額

「実は、日本は電子書籍大国」といわれる実態を見ていくと、数字以上に大きな日米における電子書籍ビジネスの格差が見えてきます。

3. 日本の電子書籍市場の拡大を阻んできたもの

なぜ日本の電子書籍市場は、拡大できなかったのか？ やはり、最大の理由はコンテンツの不足にあると考えます。では、なぜコンテンツが増えないのか？

日本のコンテンツが増えないのは、日本の出版社が守旧派だからなのか、旧態依然たる出版流通が壁となっているのか？

その原因をいくつかの側面から検討してみたいと思います。

- ・圧倒的なコンテンツ(電子書籍タイトル数) の不足
- ・既刊タイトルから段階的な電子化が、出来なかった訳、
- ・既存のビジネスモデルとの不連続性の壁
- ・日米の出版流通市場の違い

さらに、コンテンツ不足以外に、対応すべき課題も残されています。

- ・電子書籍流通体制と利用環境の未整備
- ・読者が電子書籍を利用する際の不安とは？

4. それでも電子書籍化は進むのか？

日本の電子書籍サービスは、今後、どのような展開を見せるのでしょうか？このままブームだけで終わってしまうのでしょうか？

「電子書籍元年」は、話題ばかりで何も進まない、と見られている中で、様々な動きが進められてきました。そうした動きを、渦中にある立場から振り返りつつ、今後を展望してみたいと思います。

- ・電子書籍のメリットとは？
- ・「自炊」ブームに見られる読者のニーズ
- ・「電子書籍元年」といわれる「3省書デジ懇」以後の動き
- ・新 ICT 利活用サービス創出支援事業等による電子出版環境整備
- ・民間の様々な動きと、出版デジタル機構(仮称) 設立
- ・EPUB3.0 をめぐる動き
- ・見えてきた？展望

5. 電子書籍時代の書店の役割と課題

電子書籍の時代に、書店が生き残る道はあるのか？ そこでも果たすべき役割はある、という見解を述べていきます。

一方で、必然的に出版流通全体が大きく変わっていくことも間違いないと思います。

その中で書店も変わっていかなければならない。そこから生まれる希望と課題について

ても、考えてみます。

- ・「本」と読者の出会いの場としての書店
- ・ハイブリッドデジタル販売
- ・「書店再生」への展望と課題

6. 商用電子書籍サービスと図書館

米国での図書館向け電子書籍サービスと、新しく登場した商用による無料貸し出しサービスをめぐって、問題提起をしたいと思います。読者、利用者からみれば区別のない「書籍の貸出し」サービスを、図書館としてどう受け止めていくのか？

あるいは、電子書籍化の中で急増しつつあるスパムコンテンツの問題など。書店と図書館の共通した課題について、考えてみたいと思います。

今回は、図書館サービスとの関係について問題提示にとどめ、のちの議論につなげたいと思います。

- ・米国における図書館向け電子図書館サービスの拡大
- ・会員制の商用電子書籍無料貸出サービス
- ・いわゆる「スパム」コンテンツの扱い
- ・商用サービスと図書館サービス 競争か併存か

以上